
野田さん家の3兄妹

橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野田さん家の3兄妹

【Zコード】

Z0214Q

【作者名】

橙

【あらすじ】

野田家の3兄妹は、頼れる長男の基夫、完璧超人の明彦と、その双子の妹である、私。仲は、まあ、いいとは思つけど……？

ファンタジー要素を含む、兄妹とコンプレックスをテーマにした青春ものです。

序（前書き）

「」僅かですが、兄妹間の恋愛感情を想わせるような描写があります（話自体は恋愛ものではありません）。
苦手な方は「」注意ください。

序

玄関先で、私は泣いていた。星のよく見える夜のことだった。傍らにはアキが座つていて、背をさすつと私をなぐさめてくれていた。けれど私の泣き声が、忙しない嗚咽に変わる頃には、ただ黙つて隣にいるだけだった。

そもそも、お母さんに叱られたのは私だけだった。アキが怒られることなんて、ほとんどない。私がしうもない癪癩を起こして、お母さんに家から叩き出されたんだ。何をそんなに怒られたのか、細かい原因はもう忘れた。何歳だったかも覚えていない、小さい頃の記憶だ。

右肩に柔らかいアキの体温を感じた。私の顔は涙と汗でべとべとになつていて、手でこするせいで熱く火照っていた。アキが隣にいることが心強かつたのに、同じだけぐしゃぐしゃな顔を見られたくない、「どうか行ってよ」と、つっけんどんに言つたのだ。

「ここにいる」

膝を抱えたアキは、静かにそつと言つた。

「めーこと一緒にいるよ」

穏やかなアキの声がささくれた気分に沁み込んだので、私はそれ以上アキを拒まなかつた。ひりつく喉から、しゃつくりの合間に声を押し出した。

「でももう、『飯の時間だよ。お母さん呼んでるよ』

「ここにいる」

アキはきつぱりと言い切つた。私は顔を上げた。

「でも

「ずっと一緒にいるよ。めーこがせみしくないよう」

アキはにっこり笑つて、空を指差した。

「ほら、今日は星がすごいねえ。たくさん見える」

つられて私も空を見上げた。おそらくそれは、私を泣きやませるための作戦だったのだろう。まんまと引っかかった私は、ビーズの袋をぶちまけたような星空に、ぽかんと口を開けた。

「ほんとだ、すごいねえ。これ、アキがやったの？」

「うん」

アキはなんでもないといつぶつに頷いて、「でも、内緒ね」と人差し指を口に当てた。

「内緒なの？」

「うん。でも、めーじだけには教えてあげる。ずっと一緒にいるつて、言つたでしょ」

涙が引っ込んだ私は、きょとんとして首を傾げた。

「ずっとはずっとだよ。でも、じ飯も食べよう

アキはぴょんと勢いよく立ち上がった。袖でじじじし顔をこすりながら、私もゆっくり立ち上がった。固い階段に座っていたせいで、お尻りが痛くなっていた。

「そうだ、もうーー、僕たちだけの秘密ね」

アキは私の手をとつて、ぎゅっと握った。もう一方の手は、また空を指差していた。

「秘密？」

「うん。めーじにしか言わないから、内緒にしてね」

「うん」

内緒話に、私はわくわくした。秘密、という言葉のもつ特別な響きにすっかり夢中になつた。アキの指先をたどつて、プラネタリウムよりもすごい空を見上げた。

アキのひそめた声が、すぐ耳元でする。

「僕はね、実は

「

1・アキと私（1）

まだ。本日何回目だろう。

私は冷めた気持ちで、目の前に差し出された袋を見下ろした。

数種類のクッキーを詰めた透明な袋には、薄い水色のリボンが巻かれ、小さなメッセージカードもついている。カードには金色にきらめく「Happy birthday」の筆記体の文字。とにかく気合いの入ったラッピングだった。笑顔でこのプレゼントを渡そうとする、彼女の本気が窺えた。

「ありがとう。嬉しいなあ、これを私に？」

白々しく棒読みでお礼を言つた私に、彼女は怪訝そうに眉をひそめた。おそらく、何を言つているかわからないんだろう。

彼女は見知らぬ後輩だ。確かに、友達の部活の後輩。あまり関わったことのない人に「は？」という顔をされるのは、結構傷つくものだ。私の嫌味は嫌味とも気づかず、彼女の「違います」という言葉であつさりと叩き潰された。

「アキ先輩へです。アキ先輩に、渡してください」

よろしくお願ひします、と頭を下げた彼女は、そこでやっと問題に気づいたようだった。しまった、と言わんばかりに頬を引きつらせ、恐る恐る上田づかいで私を窺う。

隣に座る仁美の肩が、ふるふる震えているのがわかつた。爆笑したいのを、寸前で堪えていたのだ。

プレゼントを私に預けた彼女は、申し訳なさそうに口元に手を当てた。

「すみません。明子先輩も、今日が誕生日なんですよね

「死ぬかと思った」

ひとしきり笑った後、「仁美はしみじみとそう言つた。

アキへのプレゼントを預かるのは、手紙だけの人も含めて、本日これで6人目だ。クッキーを持ってきた2年の女の子は、ちょっと氣まずそうな顔をして帰つて行つた。

でも気まずいと思つてくれるだけ、まだまだどう。うんざりして、私はだらしなく机に突つ伏した。

「もう嫌、アキにばっかり。私へのプレゼントなんて1コもないのに」

「双子だつてこと、皆忘れてるんじゃない?」

「仁美が面白がつてにやにや笑つた。私は思い切り顔を顰める。

「都合良すぎる。利用するだけして。私つて一体何?」

「恨み」とは尽きない。けれど腹立たしいより、またか、とうんざりする気持ちの方が強かつた。こういう扱いを受けることは、慣れています。

アキ 明彦と私は双子の兄妹だ。18年前、この5月のまさに今日、1時間くらいの差はあれど、ほとんど同じタイミングで生まれた。

けれど私とアキは、何一つ似通つものがなく、全然違うのだと生まれもつたものが。

「仁美はちょっと困つたように眉を下げた。

「まあ、ねえ。 会長なら、仕方ないかもね」

言葉から同情がにじんでいる。

その通りだつた。「仕方ない」。そうやって受容して、諦めてしまつ以外方法はない。それくらい、アキは全てにおいて優れていた。

私の双子の兄、野田明彦といえば、おそらくこの学校で一番有名だろう。これは、根拠のない身内びいきでは決してない。

まず、成績優秀。テストの順位は公表されないけど、私はアキの

成績表をこつそり覗いたから知っている。あいづは、どの教科でも10番以内に入っていた。おまけに生徒会長をやっているから、先生からやたら頼りにされている。厳しいことと有名な先生と、仲良さそうに話している姿を見かけたことがあった。

次に、運動も得意。アキの趣味はジョギングだ。毎朝、私よりも早く起きて走っている。私には変態としか思えない行為だ。中学まではサッカー部だったから、球技大会や体育祭ではクラスの中心で大活躍している。アキの出る試合は、女子の応援がどつと増えるから、すぐにわかるのだ。

そして、これがおそらく最も重要なことなのだろうけど、アキは非常に顔がよろしかった。

きりつとした一重まぶたの瞳、すっと通った鼻筋、形の良い唇。笑えば爽やかに白い歯がこぼれる。妹の私から見ても、眩しいほどの顔立ちだと思う。きれい、という表現を男に使いたくないけど、やむを得ないくらいだ。

数学の問題で、「コインを何回か投げて表が出る確率を求める」というものがあるだろう。それで言つならアキは、途方もない確率を乗り越えて、ずっとコインの表が出続けたのだ。いい要素を集めたら、アキの顔ができる。そしてきっと、コインの裏が出続けたのが私だ。

アキのまぶたは一重で、私は奥一重。お母さん譲りの柔らかな髪はアキへ、お父さん譲りのこわごわな直毛は私へ。うちの家族は皆、割と顎が細くてすっとした顔立ちなのに、おばあちゃんからの隔世遺伝で私だけ丸顔。反対に、私は家族皆と同じく中肉中背だけど、アキだけ誰より背が高くて足が長い。

おかげでアキと並んでいて、双子どころか兄妹と見抜かれることさえ、初対面ではまずなかつた。平均点の私とは比べるべくもない、顔良し、頭良し、運動神経良しの嘘みたいな完璧超人。それがアキ

だつた。

だから、誕生日に私なんかそっちのけでプレゼントが集まることくらい、当たり前なのだ。私にプレゼントが託されるのも、当然といえば当然。「アキの妹」という点が、私の最も価値あるところなのだから。

2・アキと私（2）

帰り仕度を終わらせた後も、そのまま座つてだらだら仁美としゃべっていた。机の上に投げ出した鞄に顎を乗せ、行儀悪く背中を丸めた仁美が、ふと廊下の方へ目を向けた。

「ああ、噂をすれば」

つられて私も顔を上げる。ちょうど女子の一群が、向こうからがやがやとやって来たところだった。

けれど、その中心にいるのは女子ではなかつた。頭一つ分背の高い、涼しい横顔が見える。アキだ。

アキを取り巻いている女の子たちは、全校集会の時に壇上でよく見る生徒会のメンバーだつた。無愛想にマイクに向かつて話す時は全く違つ、弾んだ声でしゃべつている。

「でしょ、行こうよ。お祝いだもん」

「パーティがわりにわ」

賑やかな一団は、我が物顔で廊下を通り過ぎていいく。あんなに広がつて歩いたら、邪魔になるだろうに。

窓にアキの姿がさえぎられて見えなくなる直前、ふとその顔がこちらを向いた。

ばつちり目が合つて、私はちょっとドキッとした。ちょうど今、批判的な目で睨んでいたところだつたから、変な汗が出た。アキが足を止めたので、周りの女の子も立ち止まる。

アキは何も言わず、ちょっと笑つて手を上げた。

じついうところ、アキは律儀だと思う。私ならアキを見かけても、向こうが気づかない限り挨拶なんてしない。アキを囲む女の子たちが、私をちらりと見て不思議そうな顔をした。

そう、そういう視線を向けられるから、嫌なのだ。

私は軽く眉を上げて、ひらひら手を振り返した。早く向こうへ行け、という意味も密かにこめた。

アキは嬉しそうに笑みを深めて、また歩き出した。女の子たちもそれについて行く。「ねー、だからカラオケー」といつ甘えぬよつな声が、遠ざかっていった。

「女子を引き連れて歩く男なんて、実際にいるんだねえ」

仁美が感心したように言った。私は返事を、口の端をちょっと上げるのみに留める。私にとってはもはや、保育園の時代から見慣れ

忘れもしないが、保育園の頃、私は大抵一人で遊んでいた。今よりずつと人見知りが激しくて、アキを取り囲む女の子に近寄れなかつたのだ。

つみきや、人形遊び。おままごとで人気なのはアキで、私は呼ばれもしなかった。一人で遊ぶのは、自分の世界に浸れるからそれはそれで楽しかったけど、やはりさみしくもあった。さみしくてつまらなくて、私はよく癪癩を起こしていた。きっと、扱いにくい子どもだったと思う。

けれど、私が泣いて暴れ出しそうになると、いつも計ったようなタイミングでアキがそばに来た。「めーこも一緒に遊ぼう」と、笑つて手を差し伸べて、呼びに来るのだ。

今思えばきっと私は当時から、皮肉なものだと感じていたんだろう。人気者のアキがいるから疎外感を感じていたのに、アキのおかげで皆と遊べた。でも、やっぱり私は一人だった。アキが私に構うと、やきもち焼きな女の子からいじわるをされたからだ。他愛ないものだけど、帽子やクレヨンを隠されたことが何度かあった。

「そういえば、めーこはプレゼントあげないの？会長に」「仁美の声ではっと我に返る。プレゼント？」

「あげないよ、そんなもの。私ももらわないし」

「そうなの？」

仁美はきょとんとした。私の答えが意外だったようだ。でも私も、どうしてそんなことを聞かれるのかわからない。

「あんたたち、割と仲良いのに」

「仲は……まあ悪くないけど」

困惑で、きゅっと眉が寄った。

「兄妹の間でプレゼントなんか、しないよ」

アキとプレゼントを渡し合うところを想像して、私は身震いした。すごく、違和感を感じる光景だ。

「ふうん、そんなものかなあ」

仁美はピンとこなせずに首をひねった。

「仁美は一人っ子だから、そんな感覚がないのだろう。この子は「きょうだい」に憧れているふしあえある。私が何度も、兄なんて鬱陶しいことの方が多いと言つても、信じないのだ。」「さあ、そろそろ帰らうよ」

私は話を打ち切って、立ち上がった。仁美もそうねえと呟いて、大きく伸びをする。

「そういえば、会長の御一行はカラオケとか言つてたねえ」「そうだね」

私は気のない相づちを打つた。ほとんど棒読みだ。

なぜって、仁美が続ける次の言葉が予想できるからだ。

「ウチらも行こよー、カラオケ」

仁美は甘えるように、机に頬をつけて上目づかいをした。

「行きません」

ぱつさりと、私は冷ややかに切つて捨てた。馬鹿馬鹿しい提案だ。

すぐに、仁美が口をとがらせる。

「ケチー。今日誕生日なんでしょう？お祝いだって、会長たちも言つてたじやんか」

「確かにねー。お祝いしたいよ、私も」

鞄を腕に下げる、目で仁美に立つよう促す。仁美はひるんだように、ぐっと口を引き結んだ。ほら、結局この子だつてわかっているんだ。

「今がテスト週間でなければ、ね」

その一言で終わりだつた。観念して仁美がうなだれる。

私たち2人は昼間の明るい帰り道を、真面目な学生じりじりじりくも寄らず、つまらなく帰つた。

3・プレゼント

居間で音楽を聞きながら、ぼんやりとソファーに座っていた。勉強にも飽きた。飽きている場合じゃないといつ理性の声には耳を塞いで、自分の部屋から抜け出してきたのだ。

ちょっと休憩と伸びをしてから、けれどもう1時間はたってしまっている。時計の針は6時を回っているけれど、家にはまだ誰も帰つて来ていなかつた。

うちの両親は共働きだ。一番上の兄も働いている。だからこの時間、私はいつも1人ですごしている。

小学生の頃から鍵つ子で通してきた。小さい頃は、学校から帰つたらいつも家でアキと一緒に遊んでいた。けれど高学年にもなるとお互いそれぞの友達と遊ぶようになつて、始終一緒にやなくなつた。

中学に入つたら、アキはサッカー部にのめり込んで、帰つてくるのは夜おそくなつた。そして今では生徒会で忙しくしている。一方の私はずっと、ただなんとなく、やる気のない帰宅部ですごしてきて了。部活でも何でも、何かに熱中するような情熱が、私には欠けていた。

そろそろ勉強に戻るうか、じつじようか。ぱうっと右手の爪を眺めながら考えていた時、玄関の扉を静かに開ける音がした。

「ただいま」

帰つて来たのはアキだつた。何も言わないのもおかしいので、おかげり、と私は小さな声で返した。

居間に入ってきたアキは、どさりと椅子に鞄を置くと、大きく息をはいた。

「疲れた。なんか、喉が渴いたな」

そう言つて、冷蔵庫を開ける。お茶の入つたペットボトルを手にとつて、アキはこちらを振り返つた。

「めーこも飲む?」

私が頷くと、アキは食器棚からコップを2つ取り出した。
こうやって自然に気をきかせられると、なんだか返つて癪に障る
気がする。

「……声、枯れてるね」

「え?」

麦茶を注ぎながら、アキが聞き返した。私は口の端を思い切り下
げて、憎たらしく言つてやつた。

「喉が枯れるなんて、カラオケはさぞ盛り上がったんでしょうねー。
本当、テスト余裕な人はうらやましい」

もちろん、ずっと休憩中だった自分のことは棚上げだ。だって、
私とアキじや条件が違うのだから。頭の出来という点で。

ああ、とアキは苦笑した。

「俺はそんなに歌わないよ。何かあの空間つて、いるだけで無性に
喉が渴かない?」

コップを持つて、アキがこちらに近づく。ソファーの前の椅子に
どかりと座つて、それに、とアキは続けた。

「テスト週間だけ、ちょっと遊びくらい問題ないだろ。テストなん
て、今までやつてきたことの確認なんだし。慌てるようなことは
何もない」

「あつそつ」

私は苦々しく吐き捨てた。頭のいい奴はこれだから、と憎たらし
くなる。今までやつてきたことの確認、だなんて、一夜漬け派の私
に対する挑戦としか思えない。

「テスト週間だつていうのに、楽しい誕生日をすゞしあがつて。不
公平だ」

ぶすぐれて、ちくちくした気持ちのまま、私は文句を言った。

ハつ当たりだつてわかっている。でも、こつも格差を見せつけられると腹立たしいのだ。双子なんだから、そつちだつて灰色の誕生日をする"」せばいい。

アキはふと笑つて、私の不平不満を受け流した。お茶のコップを、なだめるように渡してくる。

「誕生日、おめでとう

真面目な口調で言われたので、私はちょっとまじついた。

「……そつちこじや、オメデトウ」

こつちの返事は、嫌味な固い口調になつた。思つた以上に白々しく聞こえて、私は目をそらした。お互いを祝うなんて、なんだか馬鹿みたいだ。鏡に向かつて「おめでとう！」と言ひくら、意味がない。

受け取つたお茶を、やけになつてあおつた。一気に飲み干してしまつて、息をつく。すると目の前に、不意に何かがぶら下げられた。ちやり、と音を立てる銀色のチューんから視線を横にずらすと、アキが笑つていた。穏やかな表情だつたので、私は反射的に払いのけようとした手を止めた。

「何？」

「プレゼント」

催眠術をかけるかのように、アキは鎖を目の前で振つて見せた。

「プレゼントオ？」

驚いて私がそれを掴むと、アキは手を離した。するりと、冷たい細かな鎖が手の甲をすべて落ちる。その先には、緑色の石がついていた。

四角いその石をつまんで、光に透かしてみた。透き通つた、瑞々しい緑だ。緑柱石、という言葉がぱつと思い浮かんだ。

「わあ　　」

思わず、見とれる。

美しい緑の石の中には、星くずのような光の粒が散らばっていて、光の角度によつてきらきらと瞬いた。満天の星空のようにも、晴れた日の海のきらめきのようにも見える。奥行きのあるその世界に、吸いこまれそうだ。

「これ、どうしたの？」

いつまでも眺めていたい欲求を堪えて、私は視線を石から引き剥がしてアキに向けた。アキは私の顔を見て、どこかほつとしたように少し肩を下げた。

「俺が作つたんだ。季節を考慮して、新緑を閉じ込めました。気に入つた？」

「とても」

アキが作つた、と聞いて納得した。こんなのが、なかなか売つていないうだろう。売つていたとしても、宝石と同じくとても高校生に買えるようなものじゃないだろう。

そこで、はつと気づいた。

「これ、誕生日プレゼント？」

「そうだよ」

あつさり頷かれて、私は困惑した。

「どうして、いきなり？」

今まで、私たちは誕生日プレゼントのやり取りなどしたことはない。兄妹でプレゼント交換なんて、とても不思議で不自然な感じがする。だからこのペンダントは可愛いけれど、戸惑つてしまつ。アキの意図がわからないからだ。

「別に。なんとなく、あげようと思つただけ。18歳だしね」

眉を寄せる私に、アキは肩をすくめた。18歳だからなんとなく、ところのはよくわからない理由だ。余計に混乱してしまう。

「でも、私は、何にも用意していないよ」

アキ宛てに預かったプレゼントを思い出しながら、私はちょっと後ろめたい気持ちになった。自分が、ひどい薄情者になつた気がした。

「いいよ。俺が勝手にあげようと思つただけだから」「でも」

私はペンドントを握りしめた。こんなきれいなものを、もりうづだけもらって何も返さないなんて、それこそ不公平で不自然だ。私だけじゃない、お互いの誕生日なのに。

「本当に、何もいらないよ」

アキは首を振つて、立ち上がつた。そのまま、コップを流し台へ持つて行く。なんだか拒絕されたように思えて、私は何も言えずにその背中を見つめた。

「金なんてかかってないし、何かもらう方が心苦しい」

そう言つと、アキは振り向いて鞄を取り上げた。この話を、もう終わりにするつもりらしい。訝然としないまま、私はただ、アキを見送るしかなかつた。

けれどアキは、居間を出て行きかけた足を、ふと止めた。そして考へ込むそぶりをしながら、ぽつりと言つた。

「物はいらない。でも、そうだな。代わりと言つてはなんだけど」ちらりと振り向いて、アキは笑つた。

「思い出してほしい、かな」

私がぽかんとしている間に、アキは居間を出て行つた。どのくらい呆けていたかわからぬけど、私はしばらく動けなかつた。驚いたのだ　あまり、見ない笑い方だつたから。

いつもの明るい、皆を惹きつける笑顔じゃなかつた。あんな、苦みを堪えるような顔を、アキもするのだということに驚いた。そん

なの、全然似合わない。とても意外だ。

私は隣に転がっていたクッションを抱きしめて、ずぶずぶソファーに沈みこんだ。そのまま下がって、ついにはこてんと横に寝転がった。その間もずっと、アキの出て行つた扉を見つめていた。手の中のペンダントのチェーンが、さらさらと音を立てる。今日のアキには戸惑わされてばかりだ。

思い出しあはいつて、何をだらう。

4・モト兄

お風呂からあがつて、牛乳を飲みに居間へ向かつた。お風呂あがりの一杯の牛乳が、私はやめられない。牛乳はいつでもおいしいけど、あれは特別おいしいと思う。仁美には「太るんじゃないの?」と言われるけど、そんなのがセ情報だって信じてる。

居間にいると、モト兄がいた。テーブルについて、ご飯を食べている。

「あ、おかえりー」

声をかけると、新聞を読んでいたモト兄の顔がこちらを向いた。ながら食いはやめろといつもお母さんと言われているのに、この兄は聞く耳なんてもつていない。

「今日は早いんだね」

「おっ」

咀嚼しながら、モト兄は短くこたえた。

早いといつても、既に10時を回っている。でもモト兄は日付が変わつてから帰宅したり、ひどい時には会社に泊つたりするから、今日は本当に珍しい。

野田家長男の基夫兄さんは、私たちより5歳上だ。もう社会に出で働いていて、ちょっとといい加減なところはあるけど、頼れるお兄ちゃんだった。

同じ兄でも、アキには感じない安心感が、モト兄はある。かつて、「お兄ちゃん」という足場がしつかりしているからだろ。こつちも、「迷う」となく妹の立場で甘えていられる。変に比べられることがないから、モト兄という時の方が私は気楽だった。

「可愛い妹と弟の誕生日だから、早く帰つて来たの?」

モト兄の隣の椅子に座つて、私は頬杖をついた。煮物をつまむ箸をとめて、モト兄がきょとんとした。

「何、誕生日？ そういうやお前ら、今日だけ」

信じられない、と私は思い切りブーイングをしてやつた。モト兄はお茶碗を持つたまま、僅かに身を引く。

「飯食つてるんだから、騒ぐな」

「じゃあ、何かちょうどいいよ、社会人のお兄さん」
はあ？ とモト兄は眉を上げた。丸く見開かれた目がちょっと間抜けに見えて、私は笑つた。

「だから、可愛い妹にさ、お誕生日プレゼント。何かないの？」

「いや、自分で可愛いとか、寒いから」
にやつと笑つて、モト兄は軽口を返してきた。私は顔を顰めてみせる。モト兄のこいついうノリが、とても好きだ。

「プレゼントとか、欲しいモンもあるのか？」

待つてましたと、私は指折り数え上げた。

「欲しいものなんて、いっぱいあるよー。お財布でしょ、鞄でしょ、あと新しいマニキュアと」

「アホか。落ちが読めたぞお前」

呆れた顔で、モト兄はさえぎつた。

「どうせ、ブランドのやつとか言うんだろ。買えるか
やつぱり駄目かと、私は舌を出して肩をすくめる。

もちろん、ブランド物なんて冗談だ。本気でねだつたわけじゃない。モト兄もわかつて乗つてくれたんだろ？ しうがないな、とため息をつきながらも笑つてくれた。

「やつすいやつなら、買ってやらんこともない。100円ショップとかで」

「何それ！」

ひどいぬか喜びだ。モト兄はにやにや笑いながら頷いた。

「それなら何でも買ってやるぞ。化粧品でも、アクセサリーでも

そう言われて、私はふと黙つた。アクセサリー、で思い出したのだ。

アキからもらつたペンダント。今は、部屋の机の上に置いてある。あの後、ずっとほんやり眺めていたけど、結局何もわからなかつた。本当に、あいつは何を考えているのかわからない。思い出してほしい、だなんて、私は何かを忘れているのだろうか。

「……アキがや、喜びそうなプレゼントって、何だと思ひへ。」
ぽつんと聞くと、モト兄は面食らつたよつて瞬いた。

「え、明彦？ なんでまた？」

「アキに、誕生日のプレゼントもらつたんだ」

へえ、とモト兄は感心したように顎を撫でた。ペンダントの鮮やかな縁を思い浮かべながら、私は言つた。

「だから、私も何かあげなきゃまずいかな、と思つて……」
「お前ら、プレゼント交換なんてするんだな」

どこかからかうような含みで言われて、私はひょりとムツとした。アキとプレゼントをあげ合つなんて、やつぱり私には氣恥ずかしいからだ。からかわれると、私が考えたことじやないと反論したくなる。

「今までやつたことないよ。意味わかんない。アキは、『18歳だから』とか言つてたけど

「へえ、あいつもやるなあ」

モト兄はのんきにお茶を飲んでいる。

私はテーブルの下で、モト兄の足を蹴つてやりたくなつた。私がこんなに戸惑つて、途方に暮れているのに、こんなどうでもいいと、いつ態度をとられると腹が立つ。確かに、人にとってしませうでもいいことなんだろうけど。

思ひ出しだ、と言われた。私は何を思ひ出すべきなんだろう。

わからなくて、ひたひたと染みだす焦りに、追い詰められていく
うな気がする。

黙り込んだ私の不機嫌を察したのか、モト兄がなだめるように言
つた。

「まあ、何でもいいんじゃないか。明彦は明子がくれるものなら、
何だって喜びそうだ」

「それは、ないと思うけど」

既に、物じやないものを求められている。私はため息をついた。
何一つ思い出せない以上、私のあげるものでアキが喜ぶことはない
だろう。

「そうか、お前らももう、18歳なんだな」

しみじみと、モト兄が言った。その言葉に込められた感慨を、私
は不思議に思った。

18歳って、何かのきっかけになるような、そんなキリの良い年
なんだろうか。アキが私にプレゼントを贈る、理由になるような。
大人でもない、中途半端な年。私には、そうとしか思えないのだ
けど。

5・石の女

アキからもらつたペンダントを、私はじつそり学校につけていった。

お返しに困る贈り物でも、貰つたものに罪はない。私は何だかんだ言つて、この美しい縁石のペンダントを気に入つていた。気に入つてゐるから、いけないとわかつていても、ちょっとつけてみたいという欲求に勝てなかつたのだ。

それに、アキへのお返しのことを、「仁美に相談したい」という思いもあつた。

「アキが私に思い出してもほしいこと」がさっぱりわからない以上、せめて他の何かで補わなくてはならない。アキから一方的に貰いつぱなしなのは、借りをつくつたみたいで気持ち悪かった。

でも、私一人で考えていても、「アキの喜びそうなもの」なんて見当もつかないのだ。

「そんなこと言つたつて、妹のあんた以上に、私なんかが思いつくはずないじゃんか」

「仁美が呆れたように言つた。あまりに正論で、私はぐうの音も出ない。」

憂鬱なテストは今日が最終日だ。全て終わつた今、解放感に満ちあふれた皆で廊下は騒がしかつた。今日から部活が再開されるから、教室も中庭もお昼を食べる人でにぎわつている。私も仁美も、ちょうど購買へ行くところだ。

仁美の入つている軟式テニス部が始まるまで、一緒にお昼を食べつつ心ゆくまでだらだらする氣でいた。……ありゆる意味でテストが終わつたので、お互いねぎらつてなぐわめ合おうといつわけだ。

「めーー」、会長の好きなものくらい知っているでしょ？趣味とか「まあ、知つてはいるけどさあ……」

も「じも」と、私は口の中で言葉を濁した。

知つていても、何の参考にもならない。アキはジョギングが趣味で、スポーツではたぶんサッカーが一番好き。最近よく聞いている音楽は洋楽なので、私は詳しく知らない。食べ物に好き嫌いはない。私が知つているのは、この程度だ。

「いいもの貰つたから、下手なものあげられないし……」

「そうねえ。 ね、もう一回見せてよ、ペンドント」

仁美が目を輝かせて、私の顔を覗き込んでいた。私は「じそ」と、制服の下からチエーンを引っ張りだした。

緑の石が揺れて、光の加減で濃淡の複雑な色に変わる。仁美が感嘆のため息をついた。

「本当す「ご」いなあ、それ。めーー、愛されてるね」

「何、愛されてるって」

そのかゆい響きに反射的に顔が歪んだけれど、仁美は肩をすくめただけだった。

「愛がなきや買わないでしょう。それ、絶対高いって」

「……そうだね」

私は曖昧に頷いた。思わず、目が泳いでしまう。

アキはこのペンドントを買ったのではなく、作ったのだと言った。私はそれに納得したけど、きっと仁美に言つても信じてもらえないだろう。私だってアキでなかつたら、こんな石を作つたと言われても真に受けない。

私にとつては当たり前なことだから、深く考えたことはないけれど、アキにはそういう「不思議」があった。私はそれを、手品のようなのだと思っている。タネも仕掛けも、アキにしかわからない手品だ。

アキが「新緑を閉じ込めて作つた」と言つたから、そうなのだろ

う。私の頭には、アキが瑞々しい若葉を摘んで、両手で包んで、開いた時には石に変わっている、そんな光景が思い浮かぶ。実際はどうやるのか知らないけど、だいだいそんなふうにして作ったのだと思つ。

まるで手品のように、無から有を生み出すアキの「不思議」。普段意識はしないけれど、これが常識として通じるのは、おそらく野田家の中だけだ。それはわかつていた。

「それと同等の価値のものって あ

仁美が唐突に言葉を切つた。何、と聞くより前に、左肩にびんと何かが当たつた。

「痛つ」

「あ、う、『めんなさい』

足を止めて、私は慌てて謝つた。ぼーっとしていたせいで、誰かにぶつかってしまったのだ。

ぶつかってしまったのは女子だつた。ふんわりしたボブの、眼鏡をかけた女の子だ。ふと、どこかで見かけたことがあるように感じた時、その子はキッと顔を上げた。肩を押されて、こちらを睨む。強く非難するような視線に、たじろいでしまつた。そんなに、強くぶつかってしまったのだろうか。

「 それ、禁止ですよ」

女の子は、冷たい声でそう言つた。

「え？」

何を言われたかわからなかつた。女の子は眼鏡を軽く押し上げて、厳しい目を私の首元に向けた。

「校則違反です。それ、外してください」

「あ、スミマセン……」

勢いに圧されて、私は首を縮めて頭を下げた。ちょうどペンダントを出していたのが、気に障つたのだろうか。

なんなく、手で石を握つて隠す。校則を破つたのはこちらだけ

び、じろじろと無遠慮な視線をぶつけられるのは嫌だつた。第一、校則違反だとわざわざ注意してくるなんて、この子は一体誰なんだら。

「あなた、野田会長の妹？」

唐突に、喧嘩を売るような口調で聞かれた。私は、自分の眉がぐつと寄るのがわかつた。

「……………」

自然、口の口調も刺々しくなる。

仁美が小さく、袖を引っ張つてきた。私がムツとしているのを感じて、なだめようとしてくれているのだろう。「アキの妹」と見られて評価されることが、私の逆鱗なのだと仁美はわかつてい。

「ふうん」

失礼な女の子は、上から下まで私を眺めて、興味なぞついに眩いだ。

何も言わなかつたけど、その目と態度が全てを語つている。

「あなたみたいなのが、あのアキ会長の妹なの？」と言いたいんだら。

「すいませーん。」れ、ちゃんと外すんで。それじゃ

緊張した空気を壊すように明るく言つて、「仁美がぐいと私の肩を押してきた。それを聞くと女の子は、もう用はないとばかりに顔を背けて、すたすた去つていつた。毅然と歩いていくその姿を見送つて、私は舌打ちをして、仁美はため息をついた。

「さすが、キツイなー。噂通りだよ」

「誰、あれ」

苛々して、私は吐き捨てるよつに言つた。明らかに、彼女は私に対して喧嘩を売つていた。お昼時の楽しい気分が台無しだ。

「生徒会の役員の子だよ。副会長の、石橋希美。知らない？融通の利かない『石の女』って」

「……ふうん」

生徒会役員なら、行事なんかで生徒の前に立つことが多い。どりで見覚えがあるはずだ。

そして、私を目の敵にするような態度にも、納得がいった。生徒会や委員会には、アキの信奉者が多いくて本当のようだ。

「まあまあ、コロッケパンでも食べて、気分を変えようよ」

仁美がとうなすように言う。私もため息をついて、歩き始めた。

「……コロッケもいいけど、私は今日は、チーズのやつにしようかな」

仁美としゃべりながら、そっと首元のペンダントに触れた。

とても気に入っているのに、今はその石を、引きちぎって投げ捨ててしまいたくなつた。

6・仲間はずれ

モト兄が私の部屋のドアをノックしたのは、休みの日の夜のことだった。

「おい、ちょっとこっち来い」

ドアから少し顔を覗かせて、モト兄が言った。変に上機嫌な声なので、酔っぱらっているのかもしれない。

別に見られて困るものはないけど、部屋の中をじろじろ見られたくないで、私は慌てた。のんびり読んでいた漫画本を、急いで閉じる。

「何？」

「良いもんやるから」

モト兄はにやりと笑って、扉を閉めた。

どうやら、行かなきやいけないらしい。私はため息をついて、立ち上がった。モト兄の言つ「良いもの」なんて、かなり怪しいのだけど。

居間にいくと、モト兄が白い紙袋の中から、小さな箱を取り出しているところだった。何だらつと横から覗きこむと、モト兄はほれ、とそれを渡してきた。

「何？これ」

それは細長い、小さな包みだった。落ち着いた色合いの包装紙できれいに包まれている。感触は固くて、何が入っているのかはわからなかつた。

「誕生日プレゼントだ。前言つてただろ」

モト兄はどこか得意げに言った。

驚いて、私は包みから顔を上げた。まさか、本当にくれるとは思つていなかつた。

「嘘、くれるの？開けていい？」

「どうぞ。先に言つておくけど、大したものじゃないからな」
モト兄はひらひら手を振つた。私は破れないよう慎重に、爪の先
でそつと包みをはがした。

箱に入つていたのは、携帯ストラップだつた。
でも私がつけているような、安いぬいぐるみ型のやつじゃない。
なめらかな革でできた、大人っぽいデザインのストラップだ。どこ
のお店のものかわからないけれど、100円ショップで買つたので
ないことは、すぐわかる。

「おー、すごい！」

ストラップをつまみ上げて、私は素直に感動した。単純に、モト
兄がプレゼントをくれたことが嬉しかつた。ストラップ自体は正直
なところ、私が好んでつけたくなるような種類のものではないけれ
ど、それは問題じやない。こういうのは、気持ちが嬉しいのだ。

「ありがとう。つけるよ、『』」

「おっ！」

モト兄はちょっと照れくさそうに頷いた。

それにしても、「18歳」の力はこんなにすごいのか。嬉しさを
通り越して、戸惑つてしまつほどだつた。アキからもモト兄からも、
プレゼントをもらつてしまつなんて。一体2人とも、どうしたのだ
ろ？。

「 良いものって何？モト兄」

考え込んでいた時、背後からアキの声がした。振り返ると、興味
ありげな顔でアキが私の手元を覗きこんでいた。

「おう、誕生日のプレゼントだ。お前にもあるからな」

モト兄が笑つて、紙袋からもう一つ小さな箱を取り出した。私の
包みとは包装紙が違うから、別のところで買つてきたのだろう。ア
キにもちゃんと用意するところが、モト兄のいいところだと思う。
アキはお礼を言つて包みを受け取ると、さっそくそれを開けた。

「おお、すごい。これ、高いんじゃないの？」

そう言つてアキが箱から取り出したのは、音楽プレイヤーの卓上スピーカーだつた。小さなマグカップのような形をしていて、プレイヤーを中に差し込んで使うやつだ。黒くてシンプルなデザインで、オブジェとしても使えそつた。

「いや、実は在庫一掃セールとかで、安かつたんだよ」

モト兄が苦笑した。アキは顔を輝かせて、すげーという言葉を連発した。

「こういうの、ちょうど欲しかったんだ。ありがとう、モト兄」笑うアキは、本当に嬉しそうだ。そのことに、私はちょっと衝撃を受けた。

「アキの欲しいもの」の正解を、モト兄があつさりと当たることが衝撃だつたのだ。いくら考へても、私には全然わからなかつたのに。モト兄がそれを知つてゐるとは、思つていなかつた。

「ところでお前、例の新曲聴いた？」

「あれね。モト兄の最近オススメのバンドだつけ」

アキは私の知らない英語のバンド名を挙げて、すらすらと感想を述べた。ドラムがどうの、ベースがどうのと、わからない世界の単語が並ぶ。モト兄がそれに頷いたり、「いやお前、あれは最高だろ」と反論したりした。

完全に蚊帳の外に置かれた私は、2人の間でただ間抜けに立ちつくした。

ここに3兄妹がそろつてゐるのに、私だけ話に入れない。居心地が悪くて、私はうつむいて手の中のストラップをいじつた。

こういう時、女1人の疎外感を感じる。

私とアキは双子だけど、きょうだいの結びつきは、たぶんモト兄とアキの方が強いと思う。なにせ男兄弟だ。

モト兄にはアキの欲しいものなんて簡単にわかるし、アキだつて

モト兄との方が話が合う。現に今、2人とも楽しそうだ。

そして私は、ぽつんと仲間はずれ。

つまらない。

仲間はずれ。

ふとその言葉が引っかかる。私は顔を上げた。
既視感を感じたのだ。ずっと前にも、同じようなことを考えたこと
がある気がする。

いつだつたか小さい頃、今みたいに兄弟の中で疎外感を感じて、
癪癩を起こした覚えがある。モト兄とアキが2人で楽しそうに遊んでいて、うらやましくて泣いて暴れたのだ。その時に思った。

本当は、アキの方が仲間はずれなのに。

でも、そう思つたことしか思い出せなかつた。アキが仲間はずれつて、どうじうことなのだろう。ずいぶん前のことだから記憶が曖昧で、なぜそう思つたのかがわからぬ。その時仲間はずれだったのは、間違いなく私の方なのに。

口元に手を当てて、私は真剣に考え込んだ。些細なことだけど、どうしてか無性に気になつた。

「 明子、どうした?」

モト兄の声で、はつと我に返つた。気がつくとモト兄とアキの音楽談義は終わつていて、2人とも怪訝そうな顔をしてこちらを見ていた。

私は慌てて手を振つた。

「 な、なんでもない。ちょっと考え方」

モト兄が首を傾げる。

「 なんだ? 言つておくが、お前のも明彦のも、大きさは違つても値段に差はないぞ」

「そんなこと気にしてたんじゃないよ！」

まるで私が、がめついみたいじゃないか。焦つて首を振つて否定する。

「うか？」とモト兄がにやにや笑つた。その様子を面白そうに見ていたアキが、モト兄の方を向いた。

「本当ありがとう、モト兄。これ、大切に使うよ」

そう言つて、アキは自分の部屋に戻つていった。その背中に声をかけようとして、私は結局、そうしなかつた。

仲間はずれって、何のことだっけ？

「そうアキに聞いても仕方がない。あれは私の記憶なのだから。

7・居眠りヒペナルティ（一）

私とアキは2人そろって、ベランダで空を見上げていた。数年に1度の流星群があるという夜だつた。ずっと前のニュースでそれを知つて、私はこの夜を楽しみにしていた。カレンダーに丸をつけて、一緒に見ようとアキと2人で指折り数えて待つていたのだ。

けれど残念ながら空は重く曇つていて、星は一つも見えなかつた。がつかりして、私は唇を尖らせた。

「つまんない。流れ星、見れないじゃん」

「……うん。残念だね」

ベランダの手すりにつかまって、アキもため息をついた。

夏の終わりの頃だつたから、もうコオロギや鈴虫の音が周りにあふれていた。涼しく乾いた風がプランターの花を揺らして、私たちの間を吹き抜けていった。ひどくせみしい気持ちになる夜だつた。

「……楽しみにしてたのに」

ふてくされて、私はまた言つた。大事な約束を破られたような気分だつた。

なんだか涙が滲みそうになつて、意味もなく地面を蹴飛ばした。

不機嫌な私の行動を見ていたアキが、首を傾げた。

「じゃあ、流れ星見に行く？」

さらりと聞かれて、私はびっくりした。

「え、でも、曇つてるよ」

「がんばればたぶん、見えるよ。雲がなくなればいいんでしょう？」

そう言って、アキはちらりと窓の方に目をやつた。その仕草でお母さんたちには秘密のことなのだとピンときた。窓が閉まつていながら家の中には聞こえないのだろうけど、私は声をひそめた。

「どうするの？」

「屋根の上に行こう。ベランダじゃやりにくい」

アキもささやき声で返した。

屋根の上、と聞いて私は尻ごみした。そんなところに上ったことがばれたら、お母さんからどれだけ怒られるか、考えるだけで恐ろしかつた。

アキがまた、ちらりと家の中を窺つた。

「今なら大丈夫だよ。すぐ戻つてこれば、きっとばれない」

アキは身軽な動作で、手すりにひょいと飛び乗つた。

私はひやりとして、とっさに手で口元を覆つた。細い足場は頼りなくて、アキの小さな足でもすべり落ちてしまいそうだ。危ないと叫びたいけど、大きな声を出したら、家の中の皆に気づかれてしまう。

アキはけろりと笑つて、私に手を差し出した。

「怖がらなくとも平気だよ。めーこは僕がちゃんと連れて行くから」「怖がつたんじゃないよ。あたしはアキが落ちちゃうんじゃないからって、心配したの！」

私はムツとして、アキの手を勢いよく掴んだ。勝手に、意氣地なしだと思わないでほしい。

アキはちょっと目を見開いたあと、ぱっと嬉しそうに笑つた。何がそんなに嬉しいのか、私にはよくわからなかつた。

「平気だよ。前に言つただろ？ 僕は」

「

「 と。おい、いい加減にしろ、野田妹！」

すぐ横で怒鳴られて、私はびくんと飛び起きた。

「は、はい！」

反射的に返事をして、横を向く。角刈りの強面な男の人人が、眉を上げて睨むように私を見下ろしていた。

一瞬、頭がついていかず私は固まつた。このコワイ人は何？

でも、教室中に広がっていく忍び笑いで、やつと今が英語の授業中なのだと思い出した。かあつと、恥ずかしさで頬が熱くなる。

完全に、居眠りをしてしまっていたようだ。

「まったく、3年にもなってそんな授業態度じゃ、どうしようもないぞ」

指先で苛立たしげに私の机を叩き、英語の高科先生は教卓へ戻つていった。私は縮こまりつつ、ドキドキ鼓動の速まつた胸をそつと押された。高科先生は、本当は英語じゃなくて体育の先生なんじゃないかと言いたくなるくらい、厳つい風貌をしている。起きがけにこの先生に怒鳴られるのは、心臓に悪かつた。

「お前近頃、どうも身が入っていないようだな。テストも良くなかったし」

先生は不機嫌そうに呟いた。クラス全員の前でテストのことを話題にされて、私は慌てた。

「……スマセン」

少し頭を下げて、もうひとと小声で謝る。高科先生の「うう、すげすげ」とキツイ物言いが、私はとても苦手だ。

ふと目を向けると、斜め前の席の仁美が、振り返つてこちらを見ていた。呆れと同情を半分ずつ混ぜたような笑みをよこしてくる。私はこっそり、肩をすくめてみせた。

「まあとにかく、お約束のペナルティだ。放課後、生徒会顧問室に来るよ」

厳しく言い渡されて、げ、と頬が引き攣つた。

そうだった。高科先生は、授業中の私語と居眠りと携帯に関して、かなり厳しく対応する。見つかったら、問答無用でペナルティだ。よりによってこの授業で居眠りしてしまった自分のつかさに、私は舌打ちしたくなつた。

眠っている間、何かふわふわと夢を見ていた気がするけど、そんなことは問題じゃない。

「わかつたか？野田妹」

「……ハイ」

下を向いて、私は小さく返事をした。本当は、「野田妹」なんて腹が立つ呼びかけには答えたくなかったけど、下手に反抗してペナルティが増えるも困る。私は苛立ちを、ぐっと飲み込んで堪えた。

8・居眠りヒペナルティ（2）

高科先生は生徒会顧問の先生だから、職員室ではなく顧問室に机がある。生徒会顧問には高科先生を始め厳格な先生が多いから、私は苦手だった。何をさせられるのかと及び腰で向かつたけど、言いつけられたのはただの掃除だった。

顧問室横の小さな備品室を開けて、高科先生はあっさりした態度で言つた。

「棚の整理と、ほうきがけね。俺はこれから会議だから、終わったら鍵だけ返しておいて」

忙しくて生徒の罰掃除なんかに構つていられないのか、意外なその監督の甘さに私は拍子抜けした。けれど私の気の抜けた顔を見て、先生はしつかり釘をさしていった。

「ちゃんとやれよ。いい加減にやつたらわかるんだからな」

念を押すように睨む目を、私は首を縮めてやりすぎした。ふてくされて無視をしていると思われるかもしねだが、これが一番穩便な対応なのだ。気を抜くと、睨み返して文句をこれでもかと並べ立てて反発したくなる。どうしても、高科先生とは肌が合わないらしい。

それを爪先で蹴飛ばして、私はやれやれとため息をついた。なるべく早く終わらせて、帰ろう。

まずは床のほこりを、ほうきでさつと掃き集めた。それから机についた棚を整理していく。もしお母さんがいたら、「順序が悪い、掃

除は上から！」と注意するのだろうナビ、そんなきちんとした手順は面倒だ。やつてやる義理もない。

ほつきがけよりも、棚の整理の方が手際わそうだった。はさみやカッターなどの文房具があちこちに散らばっていて、プリントは無造作に積み上げられているだけだ。それを適当に整えて、元の場所にまた突っ込んでいく。うんざりしながら何度もその作業を繰り返していた時、整えたプリントの山からA4の紙が一枚、ひらりと落ちた。

「もう。せつかくきれいにしたのに」

私はかがんで、その紙を拾い上げた。何気なく見てみるとそれは、先月の生徒会新聞だつた。

4月号の紙面には、就任したばかりの生徒会役員の紹介と抱負が書かれていた。トップで一番大きなスペースを使っているのは、もちろんアキだ。感じよく微笑んで、まっすぐ前を見つめている写真が、記事の横に掲載されている。アキの写真うつりの良さは、本当にうりやましい。

記事の中では、公約の実現について抱負が述べられていた。役員選挙の時アキが公約に掲げていたのは、一部校則の見直しと、学校祭の充実の2つだ。

特に「校則の見直し」の方は、アキたち生徒会が長く取り組んでいる悲願だつた。アキは1年の頃から生徒会に入っているけれど、その時から既に先輩たちが中心になつて活動を始めていたらしい。長い時間をかけて、面倒で正当な手順を踏まなければ、重い石のような学校の規則を動かすことはできない。先輩から何期も引き継がれてきたこの案件に、アキは自分の代で決着をつけたいと考えているらしかつた。以前、ふとした会話の中で、こんなことを言つていた。

「たぶん先生たちも、どうしてそんな規則があるのか、理解できないものが多いと思うよ。そんなのおかしいって、俺たちは言い続け

てきた。議論もつくした。もう、機は熟したはずだ」

雑談の中のことだつたから口調は軽かつたけど、真剣な横顔からは、強い決意がうかがえた。その時、私はその熱意にただ圧倒され、ふーんと意味のない返事をすることしかできなかつた。

新聞をプリントの上に戻して、私はちょっと口元をつり上げた。

本当に、私とアキは全然違う。

双子なのに、全く似ていない。似ていないことを、引け目に感じてしまふくらいだ。アキは完璧だ。完璧で、それだけじゃなく努力もしていく、真剣に打ち込んでいることがある。間抜けにぼーっとしているだけの私じゃ、何をどうしたって太刀打ちできないはずだ。

「……双子なのにね」

何度思つたかわからないことを、私はぽつりと呟いた。

その時、いきなりガラツと扉が開いて、私は飛び上がるほど驚いた。

高科先生が来たのかと思つた。サボつていたわけではないけど、少しほーつとしていたところだつたから、私は慌てた。

けれど振り返つてみると、そこにいたのは、先生ではなかつた。

「……あなた、何してるの？」

咎めるような目つきでじろりと睨まれ、私はどつさに答えられなかつた。

性格のキツそうな目つき、柔らかそうなボブの髪。ノーフレームの眼鏡を押し上げる仕草も、見たことのあるものだ。

石橋さんだつた。

驚いて動搖してしまつたけれど、私はすぐに立ち直つた。

先生じゃないなら、焦ることはない。何をしているのかと聞かれただけれど、それはこちらのセリフでもある。この人は何をしに来たんだろうと、私は不思議に思つて石橋さんを見つめ返した。

石橋さんは、ちらりと私の首元に目を向けた。以前、ペンドントを注意されたことを思い出して、私は居心地が悪くなつた。あれ以来、ペンドントをつけて学校に来たことはない。だから堂々としていればいいのだろうけど、厳しくチェックしてくるような視線が、不快だつた。

「……何つて、掃除だけど」

視線を避けるよう身をよじりながら答えると、石橋さんは不審げに眉をひそめた。

「ここは生徒会管轄の備品室です。勝手な立ち入りはできないはずだけど」

勝手な、というところに力がこもつていた。一方的に決めつけるような言い方に、私はムッとした。

「別に、忍び込んだわけじゃない。先生に言われて掃除してるだけだよ」

「先生？ 何先生ですか？」

どうして不審者扱いされて、詰問されなきやいけないんだろう。だんだん積み上がる苛立ちをからうじて押さえつけながら、私は顎を突き出して憎たらしく言つてやつた。

「英語の高科先生です。授業中の居眠りのペナルティに、こここの掃除をしろって言されました」

石橋さんの眉がぴくりと動いた。

「信じられない、居眠りなんて」

石橋さんはそう呟いてから、はつとしたように口元を押さえた。気まずそうに目をそらす。

でも今更口を押さえても、言葉は既に私の耳に届いてしまつた。つこうつかり、みたいなアピールをしたつて駄目だ。私はもう、完

全に頭にきた。

この人は一体、何だというのだろう。私は思い切り、石橋さんを睨みつけた。

「用がないなら、出て行ってくれない？掃除の邪魔なんだけど」

「用ならあるわ。資料を取りに来たんです」

石橋さんもムッとしたように、強く言い返してきた。

どうやら私たちは、お互いがお互いに苛々してしまった存在らしい。天敵同士なのかもしれない。私は既にこの人と向かい合っていることが我慢ならないし、向こうだつてそうだろう。

そういう人とは、早く離れた方がお互いのためだ。私は提案のつもりで言った。

「なら、さつさとそれを取つて、帰れば」

「何、それ」

途端に、石橋さんの頬がさつと赤くなつた。

「ここは生徒会の部屋よ。どうして、私があなたに言われて出て行かなきゃいけないの。 生徒会とは何の関係もないあなたに」

石橋さんは強い口調でまくしたてた。がらりと変わつたその様子に、私はちょっと慌てた。何か、この人の地雷を踏んでしまつたのだろうか。

「そういうことじゃなくて、気に入らないんなら」

「私だって、気に入らないわ」

石橋さんはぴしゃりとさえぎつた。どうも、話が通じない。だからそうじやなくて、と続けようとした私に、石橋さんは吐き捨てるよつに言つた。

「会長のきょうだいだからって、何様のつもり。あなたなんて、野田君の妹にふさわしくないような人じゃない」

言われた瞬間、頭が真っ白に沸騰した。

同時に胸がすうっと冷たくなって、眩暈がしそうだつた。

「……そうかもね」

怒りのあまり声が震えるなんて、初めてのことだ。
これほど怒つていて、ひどく冷静に石橋さんの言葉を受け取
つている自分もいた。感情がぐちゃぐちゃに散らばって、混乱して
しまう。睨みつけてくる石橋さんに、私は口の端だけで血潮的に微
笑んだ。たぶん、失敗したと思つた。

「私も、そう思つ」

今までずっと、そしてつらさをも、考えていたことだ。

でももう、限界だつた。

「……じゃ、私が帰る。石橋さん、ここのは鍵、よろしく」
いきなり低く勢いのくなつた私の声に、石橋さんは戸惑つたよ
うに瞬いた。私はうつむいて彼女の顔を見ないようにしながら、足
早にその横を通り抜けた。

罰掃除なんて、もう知らない。一刻も早く、ここから離れたかつ
た。

廊下を通り、靴箱のある昇降口へ向かう。すたすた歩く足はしだ
いに、駆け足になつた。顔に受ける風が、ひどく耳にしみた。

9・双子（1）

いつかの、遠い声がする。

めーこちゃん、アキくんと双子なんだよね？

それは、期待が外れてがっかりした顔で言われる言葉。

馬鹿にするように笑つて指をさされて、言われたこともある。あるいは、田配せと共にひそひそとさやき合われたことがある。

私はそれが大嫌いだった。勝手に期待して、勝手に失望しないでほしい。アキと比べるのではなく、「私」をちゃんと見てほしい。何度もそう叫んだのに、届くことはなかつた。

家族と仲の良い友達は、私のことをわかってくれる。本当は、それだけで満足すべきなかもしれない。でもやつぱりもつとわかつてほしくて、周りの人々「私」を訴えかけるけれど、いつも「アキ」の幻影に打ち砕かれるのだ。

めーこちゃんは、全然違うよね。

過去に突き刺さった声が、もづもづと前のことに、何度も頭の中に響いている。

もう嫌だ。大嫌いだ。

部屋に閉じこもつて、私は頭から布団をかぶつていた。

最悪の気分で学校から帰つて来て以来、ずっとこうしている。とうに夕食の時間は過ぎていた。お腹はすいているけれど、私はベッドの上に座りこんだまま、動けなかつた。お母さんには、ちょっと具合が悪いのだと言って誤魔化した。

でも、全くの嘘じやない。少し頭が痛いし、胸の奥が重く沈んでいるようで、息苦しかつた。……風邪をひいたわけではないけれど。石橋さんの言葉が、昔の嫌な記憶までどつと呼び起こして、頭がパンクしてしまいそうだつた。嚴重に鎖を巻いて鍵をかけていた箱が、いきなり破裂してしまつたかのようだ。押し寄せた負の感情に混乱して、一步も動けない。ただ布団の中で丸くなつて、じつをしているしかなかつた。

どうして私は、アキと比べられて、軽蔑されなきやいけないんだろう。石橋さんの冷ややかな目が、保育園の時の意地悪な女の子たちと重なつた。

もしかしたら、石橋さんはアキのことが好きなかも知れない。だから私のことが余計に気に入らないのだろう。できそこないのくせに、アキの双子の妹だから。

なんだやきもちか、と笑い飛ばしてやるひつとしたけど、駄目だつた。私は膝を抱えて、腕に額を押しつけた。遠くへ行つてしまつたかった。

控えめな、ノックの音がした。意識がそれに引っぱり上げられて、私は顔を上げた。照明が眩しくて、目がチカチカする。もしかして今、少し寝ていたのだろうか。何時なんだろう、と思ひながら、私はドアの方を向いた。

「……誰？」

「俺だけど。めーこ、体調悪いんだつて？」

そう言つて顔を覗かせたのは、アキだつた。

「大丈夫？母さんが、何か食べるかつて」

心配そうな表情をしたアキは、布団をかぶつた私の姿を見た途端、ふつと吹き出して笑つた。

「何してんの。まんじゅうみたいだ」

軽い楽しげな笑い声が、今の私には癪に障った。少し遠ざかって
いた嫌な気分が、ひたひたとまた戻ってくる。

「……何、それ。人のことそんな風に言わないでよ」

「だつて、丸くなつて面白かったから」

アキはくすくす笑つてから、私の顔を窺うように少し首を傾けた。
「それで、体調は？何か食べれそう？」

アキはきつと、善意で私の部屋に様子を見に来てくれたんだろう。
でも、駄目だ。今のごちゃごちゃな私には、素直に感謝することは
できなかつた。

私の間抜けな姿を笑いに来たのかつて、苛立ちが胸に湧き上がつ
た。

「……本当、信じられない。生徒会の人って、失礼な人ばかりだ」
「どうしようもない気分のままに、私は吐き捨てた。

「え？」

アキはきょとんとして、目を丸くした。当然だ、アキは知らないことなのだから。いきなり中傷されても、何のことかわからないだろう。

でも、止まらなかつた。

「あの『石の女』とかいう人だけかと思つたけど、皆そりなんだね。顧問の先生だつてムカつく奴なんだもん。最低の集団だ」

アキの表情が消えた。

言い過ぎだつてわかつていたけど、謝る気なんか毛頭なかつた。私は挑戦的にアキを睨みつけた。アキも、腹を立ててしまえばいいのだ。

アキはするりと部屋の中に入つてきて、ドアを閉めた。とても静かな動作だつた。

「……めーこ、何があつたのか？」

落ち着いた声からは、アキの怒りは読みとれなかつた。内心なんてわからないけれど、見る限り平静な様子だ。

「別に、何もないよ」

私は首を振つた。予想以上に、冷たい声が出た。

「ただ、気をつけた方がいいんじゃない。生徒会選挙つて、人気投票みたいなものでしょ？『石の女』みたいに嫌な奴だと、皆から支持されなくなるよ。アキも」

「それ、やめない」

アキは静かに、けれどきつぱりと私の言葉をさえぎつた。

「何が？」

「その呼び名。悪意があるだろ。生徒会にそんな名前の人はないよ」

アキは怒らない。怒鳴らない。そして正しい。

ひどいのは、私だけだ。

「何かあつたのだろうけど、めーじに生徒会の仲間をそいつ呼んでほしくない。……そういう言い方は、自分を貶めると思つ」

アキの言葉に、カツと頭に血が上った。

一瞬のうちに、アキに投げつけたい言葉がどつと喉元に押し寄せた。

感情の奔流に、目が眩む。今日のことだけじゃない、今までの、18年分のことが一気に膨れ上がって、アキめがけて爆発しそうだつた。でもその濁流は、あまりにぎゅうつぎゅうつと詰まつさせて、口から出ることはなかつた。

言つてやりたいことがあるのに、それは言葉になる前の塊のまま、喉を塞いでいるだけだ。悔しい。ぐつと握つた拳が、ぶるぶる震えた。

でも、負けたくなかつた。こんなに怒つているのに、何も言わないまま引き下がりたくない。こんなことですからアキに勝てないなんて、あまりにもみじめだ。

「 私、アキの妹じゃなきやよかつた!」

私は詰まつた喉をこじ開けて、叫んだ。

言つてから、ああこれは本心だ、と思つた。最初に言おつとしたこととは違うけれど、これは紛れもない、私の本心だ。

その証拠に、まるで用意されていたよつとするすると、言葉が続いた。

「あんたと双子なんかじやなきやよかつた! そつすれば、比べられることもなかつたのに。みじめな思いをすることなんて、なかつた

のに。私が自分を貶めるんじゃない。貶められるのは、アキのせいだ」

瞬きをした拍子に、涙がじろりと落ちた。

自分がどんな顔をしているか、考えたくなかつた。私をじつと見つめるアキの表情は、真剣で怖いくらいだ。アキのこんなに固く険しい顔を見るのは、初めてかもしない。

「……アキと兄妹なんて、もう嫌だ」

全部言つてしまつてから、私は唇をかみしめた。喉のつかえは、もうなくなつていた。かわりにぽっかりと、うつろな穴があいたような気がした。

しんと、部屋に沈黙がおりた。私たちはその間、ただ見つめ合つた。何もかも、止まつてしまつたようだつた。

けれどその時間はすぐには、アキによつて破られた。

「俺も、そう思つ」

ぱつりと言つて、アキはぎこちなく微笑んだ。

あの時の笑い方と一緒に、私はほんやり思つた。あの、誕生日にペンドントをくれた時。「思い出してほしい」と言つた時。

「めーこと兄妹じゃなかつたらつて、ずっと思つてたよ」

もうそれ以上、聞きたくなかった。私ははうつむいて、アキから目をそむけた。

「……出てつて」

アキは言われたとおりに、静かに部屋を出て行つた。ドアの閉まる音だけが、布団ごしに私の耳に届いた。

ぱとぼと、蛇口が壊れたみたいに、涙が止まらなかつた。私は本当に大馬鹿だ。アキを怒らせたのは私自身なのに、どうし

て突き放されたように思つてゐるんだろう。

最初にひどい言葉を投げつけたのは私だ。アキが怒ればいいと思つたのに、怒つたアキにやり返されることを考えていなかつたのだと、今更気づいた。

それで見捨てられた、と思つなんて。傷ついて、さみしくなるなんて。本当に馬鹿だ。救いようがない。

俺も、そう思う。

アキの、少しかすれた声が耳によみがえる。

私たちは2人とも、同じことを考えていたんだ。兄妹じゃなければよかつた、つて。アキもそう思つていたなんて、知らなかつた。変なところで気が合つものだ。そういうところはとても双子らしいと、私は鼻をすすり上げて笑つた。

1人ぼっちで置いていかれたように、胸がすうすうと冷えた。

泣いて泣いて、いつの間に開いたのだな。気づくと私は、夢を見ていた。

夢を見ている最中に、「あ、これは夢だ」と気づくのはとても珍しい。でも、わかった。あまりにも、不思議な世界だったから。

私はアキからもらったあのペンドントを、じっと見つめていた。
わらわらと、緑の石の中で光の粒が瞬く。誘いかけるようなそのきらめきを、きれいだな、と思った瞬間、私は溶けていた。
すうっと、緑石の中に吸い込まれたのだ。この時点で、ああ夢なのだと思った。夢だから、怖くはなかった。ゆらゆらと濃淡を変える緑の海の中を、深い方へどんどん沈んでいった。

でもこの海は、冷たくもないし、息が苦しくもならない。不思議に思つて、私は首を傾げた。水の中なのに、溺れないのだろうか。

「水じゃないよ。前に、新緑だつて言つただろ」

呆れたような声がして、私は振り向いた。

そこには、アキがいた。アキは片手を上げて、何かを掴むような動作をした。そしてすいと音もなく私に近づくと、ぱり、と手を開いてみせた。

アキの掌の上に、つやつやした若い葉っぱが一枚乗っていた。
私はその葉っぱとアキを交互に見比べて、これは夢だ、ともつ一度思つた。

なぜならアキの姿が、いつもと違うからだ。

「アキ、なんでそんなに、小さいの？」

田の前にいるのは、子どもの頃のアキだった。

何歳くらいだろう。今よりずっと線の柔らかい、目のくまっとした可愛い顔が、とても懐かしかった。格好も子どもの時のもので、私は思わずにやつとした。半ズボンに、キャラクターもののシャツを着たアキなんて、今じゃ絶対に見られないだろう。

アキは子どもの姿に似合わない、大人びたため息をついた。

「……自分のこと、よく見てみて」

「え？」

言われて私は、慌てて自分の姿を見下ろした。そして本当に、驚いた。

いつの間にか手も足も、小さくなっている。おまけに着ている服は、クマのアップリケがついた、ピンク色のワンピースだった。小さい頃の、お気に入りの服だ。これしか着たくないと言つて、お母さんを困らせた。

「嘘、私もちつちゃくなってる」

途方に暮れて、私は両手で頬を押さえた。そういえば、声も高く幼くなつていって、今の私のものとは違つ。戸惑う私に、アキは苦笑した。

「めーこが子どもだから、俺は合わせただけだよ。……本当、変わらないな」

しみじみ言われて、私はちょっとムッとした。

こんな子どもの頃から変わらないと言われても、嬉しくない。全然成長していないって、言われているのと同じだ。まるでアキばかり、大人になつたような言い草だ。

「今は、アキも同じ子どもでしょ。威張らないでよ」

「威張つてなんかないよ。 わあ、もう緑の道を抜ける」
アキは上を振り仰いだ。私もはつとして、周りを見回した。

気づけば緑の世界はぐつと深く、濃くなっていた。

もう間もなく、いつそう深い黒へと行きつくるのだろう。けれど、

暗くはなかつた。あの光の粒がまばゆいばかりに増えて頭上を覆い、
はるか遠くまで輝いていた。

なんて星の明るい夜だろう、と思った。

「すうい」

口を閉じるもの忘れて、私は美しい星空に見入った。

ぐるりと見渡す限り、さえぎるもののない星空だ。プラネタリウムよりもすうい。あまり見つめていると、宇宙へ投げ出されてしまいそうだ。

圧倒されてふらつく私の手を、アキが掴んだ。温かいその手を、私もにぎり返した。

吸い込まれそうな空から田を離して、隣を見た。アキが穏やかに笑っている。

私もなんだかほっとして、笑い返した。美しきすぎる星空が、少し怖くなっていたけれど、アキといふから大丈夫なんだうつと思えた。

ふいに、アキと手をつないで星を見上げることが、初めてではないと思い出した。

いつかもこうして、2人で星空を見ていた気がする。一度だけじゃない、こんなことがたくさんあった。アキがいつも、私に見せてくれたのだ。皆には内緒だと黙つて、特別に。

「……アキ」

「なに?」

「星、すういきれいだね」

アキはふつと微笑んだ。

「うん。きれいだね」

「これ、アキがやつたの?」

「うん」

アキは何でもないといつぶつと、あっさり頷いた。

私も知っている。今更、驚くようなことでもない。アキはそういう

う、「不思議」をもつていいのだ。

どうしてそうなのか、私はその理由も知っている。

「アキはさー」

私は星空を指差した。

美しく瞬く星。その彼方。

「あそこから、来たんだよね」

「 そうだよ」

アキは当然のように、静かに頷いた。

思い出した。

遠い昔、小さい頃、アキが打ち明けてくれた内緒話。

「僕はね、実は 向こうから來たんだ」

そう言つてあの日、アキは夜空を指差した。

アキの指差した先が、私にはよくわからなかつた。きょとんと首を傾げて、聞き返した。

「向こうって、お星さま？」

「うん、ずっと遠くから。あのね、お船に乗つてふわふわ浮いて、この家に來たんだ」

「 すごい！」

絵本みたいだと思つて、私はわくわくした。星くずが宝石のよう

に輝く海を、アキと私が大きな帆船に乗つて冒険するところを想像

して、胸が躍つた。なんて素敵で、楽しそうなんだろつ！

「ねえねえ、私も一緒に來たの？アキと一緒に、お船に乗つたの？」

勢い込んで、私は聞いた。双子なんだから、当然そつだろつと思つた。

けれど、アキは目を伏せて首を振つた。

「ううん、僕だけだよ。僕だけ、1人で……避難してきたんだ」
だから僕はね、仲間はずれなんだ。そう言って、アキはぐっと口元を引き結んだ。

楽しい冒険をしたという表情ではなかつた。むしろ悲しそうなそれをじつと堪えるような表情だつた。見ている方の胸が、きゅつと締め付けられてしまいそうな。

アキはさみしいのだろうかと、私はその時思つた。だからつないだ手を、ぐつと強く引っ張つた。

「じゃあ、今度は2人ね。アキ一人でお船に乗るのはずるい。あたしたち、双子でしょ」

私もいるよと、言いたかったのだ。1人ぼっちでさみしい時は、につこり笑つて手をつないで、一緒に遊ぼうと言つてもらえるのが、一番嬉しい。それを私は、アキから教わつていた。

アキは少しひくりしたように目を見開いてから、弱々しく笑つた。

「めーー、話聞いてた?だから、僕たち本当は、双子じゃないんだよ」

私は聞こえないふりをした。

「でも今は、双子でしょ? ハイ、もう決まり。決まつたから、変更はナシ。文句言つたら、遊んであげないからね」

一方的に決めつけた私に、アキはあっけにとられたようにぽかんとした。そして、ふつと吹き出した。

「……そういうの、『横暴』っていうんだよ」

「いちいち難しいこと言わないでよ。ムカつくなあ」

私は唇を尖らせた。でも、アキに明るい笑顔が戻つて、本当にほつとした。

そして、アキが悲しくなることなら、この話はやつぱり内緒にして、忘れてしまおうと思ったのだ。

全部、思い出した。

アキは静かな表情で、私を見ている。遠い日の記憶にあるような、悲しさやさみしさは、その顔には浮かんでいなかった。

これが、アキの思い出してほしことだつたのだろうか。

「……私、思い出したよ」

小さく呟くと、アキは頷いた。

「うん。……あつがとう」

ふいに、胸の中を冷たい風が通り抜けたように、れおしがこみ上げた。

今、隣にいるアキが、ひどく遠い。手をつないでいるのと、宇宙の彼方に離れていつてしまつたかのようだ。星明りに照らされたアキの表情が、ひどく静かだから、そういうのだろうか。

よみがえつた思い出と、わきせびの瞳の瞳のことで、心が押しつぶされそうだった。

……私は、やつれ、何てことを言つてしまつたのだひつ。

「アキ、ごめん」

泣きたくはなかつたけど、こじりでぐる涙を抑えることができなかつた。

「ひどいこと言つていめん。嘘だよ。アキが嫌なんじゃないよ」

小さい頃みたいに、落ちる涙を掌で下手くそにぬぐつた。

たぶん私は今ぐしゃぐしゃで、みつともない顔になつているんだろつ。でも、構わなかつた。どうせ、今は子供もなんだ。我慢するのも、取り繕うのもやめた。

取り繕おうとする前に、アキにちやんと言わなきゃいけないことがある。

「比べられるのだって、本当は、アキのせいじゃないのに。ハツ当たりしてごめん。本当は全部、私の問題なのに。私がもつと、ちゃんとしていればいいだけなのに」

比べられるのが嫌だと言いながら、常に引き比べて嫉妬していたのは、私自身だ。何の努力もせずに、ただ拗ねていた。自分の怠惰を、アキのせいにしていた。

大馬鹿な自分が情けなくて、悔しくて、涙が止まらなかつた。

アキは、少し困ったような顔をして笑つた。

「……無理、しなくていいよ」

とても優しい声だつた。

「俺と兄妹じやなきやよかつたつて、あの言葉、嘘じやないんだろ？」

アキの声には、責めるような響きはなかつた。だから私は、いつそつ何も言えなかつた。

そうだ。あれは確かに、嘘じやなかつた。

幼い頃、双子なんだと力強く宣言したことも忘れて、私はアキと兄妹でいることが嫌になつていて。いつからか、アキさえいなければ、そう心の底で考えるようになつていたんだ。

醜いその心を、アキはずつと、見抜いていたんだろう。

「それに俺も、そう思つて、言つただろ。あれも、嘘じやないよ」

なぐさめるような口調なのに、なぜだか私は、突き放されたように感じた。柔らかいけれど決して破れない壁を、今、私たちの間に作られたような気がした。

私は、二つかと同じように、つないだ手をぐつと強く引いた。

兄弟じゃないし、お互い良かつたね。そう言って、アキが星空の向こうへ遠ざかっていくてしまいそうに思ったのだ。だから、振り払われる前に、その手をぎゅっとぎゅつた。

「嫌だ」

べそべそ泣きながら、私は首を振った。

「私、もっとうちちゃんとする。強くなる。比べられても、気にしないつて、揺らがないようになる。ハツ当たりもやめる。だからどこにも行かないで。

続けようとした言葉は、嗚咽に邪魔されて、かき消えた。私はそれ以上、しゃべることができなかつた。本当に子どもに戻つたみたいに、つないだ手にすがつて、声を上げて泣いた。

アキの手の感触が消えた。と思つたら、ふわりと両肩が温かいもので包まれた。

「なんだ。思い出したんじやなかつたの？」

びっくりして目を開けると、すぐ目の前にアキの肩があつた。水色のラインが入つた、小さい頃のシャツ。よく知つてゐる、アキのにおいがした。

アキの手がぽんぽんと、優しく私の背中を叩いた。まるきり、小さい子をなだめて寝かしつける手つきだ。同い年のはずなのに、完全に子ども扱いされている。

すぐ耳元で、アキはふつと笑つたようだつた。

「ずっと一緒にいるつて言つたよ。そのことも、思い出してもしかつたのに」

よしよし、と頭をなでられて、私はアキの肩に濡れた耳元を押しつけた。

「でも、アキは嫌なんでしょう。……私と一緒にいるのが

『そういう意味じゃないよ』

アキは少し身を離して、首を傾けて私の顔を見た。片方の口の端だけつり上げて、アキは笑つていた。どこか自嘲的なその笑みは、アキには珍しいと感じた。

「兄妹じゃなきゃこいつて、俺のは、……めーことは意味が違う。

思い出してもしかつたのも、それをちゃんと、めーこに知つておいてほしかつたからで……俺の勝手な都合なんだよ。『ごめん』

「なんで謝るの」

私はぐすぐす鼻をすすつた。アキの言つている意味がよくわからなかつた。私とは意味が違うつて、『どういうことなんだらう』。

アキは親指で、私の目じりの涙をぬぐつてくれた。

「俺と比べられていろいろ言われるのが嫌だつて、それがめーこの問題なら、兄妹が嫌だつていうのは俺の問題だよ。めーこのせいじやない。……悲しくさせと、『ごめんね』

「じゃあ、アキはどうにも行かないね。私たち、ちゃんとこれからも兄妹だね」

これからも一緒にいるよねと、私はちゃんと確認したくて聞いた。

アキはあつけにとられたように、ぽかんと口を開けた。めったに見る』ことのない、とても間抜けな表情だ。

「本当に、変わらないなあ、めーこは」

果然とそう言つて、アキは大きなため息をついた。

「もう18歳なのに。全然話を聞かないところ、小さい頃のままだゆつくり首を振つて、アキは仕方ないなあというふうに、柔らかく笑つた。諦めたというより、やれやれ、と許すような笑顔だつた。私はほつとした。何を呆れられて、許されたのかわからないけれど、少なくともアキは私を嫌いになつたわけじゃない。それだけはわかつた。

「今はもう、それでいいよ。お互いかからがんばるつてことで。

次はこうこう、子どもの姿はナシでね」

そう肩をすくめて、アキは空を振り仰いだ。降つてきそうな星空の、どこを見たんだらう。まるで壁の時計でも見たとこいつのような気軽さで、さらりと言つた。

「まあ、もう休まないと。明日、学校に遅刻するよ」

いきなり現実的な言葉が出てきて、私は面食らった。

「えー、嫌だ。明日絶対、ひどい顔になつてる」

私は慌てて、手で「じし」と顔をこすった。この夜だけで、もう一年分くらい泣いた気がする。明日どんなことになつてしまつのか、考えるだけで恐ろしかつた。

「それは、しょうがないよ」

アキは苦笑して、私の手を引いた。

ふわりと、また抱きしめられる。馴染んだアキのにおいと、安心する温かさに、私は目を閉じた。

耳元で、アキがさわやく。子どもじゃない、18歳の、アキの声だった。
「おやすみ」

朝起きて、鏡を見ると案の定、まぶたが腫れ上がっていた。

「うげー、最悪……」

学校の皆さん何と言われるだろーと考へて、私はうめいた。特に仁美には、絶対に誤魔化せないだろー。何があつたのかと、しつこく聞かれるに決まっている。……先生に大目玉を食らうリスクを冒して、化粧をいつもより念入りにすれば、少しはマシだろーか。

せめてもど、学校へ行くまでの間、濡れたタオルで目元を冷やすことにした。

手早く制服に着替えて、鞄に教材をつめた。いつもの朝なら、寝起きでぼーっとしながらゆっくり準備をするけれど、今日はその時間が惜しい。冷たいタオルを目当てて、そのままじばらく、椅子に座つてじつとしていた。少しでも長く冷やして、顔をいつも通りにしたい。

いい加減に朝ご飯を食べなきやいけない時間になつたので、私は立ち上がつた。そのときふと田の端で、何かがきらりと緑色に光つた。

ペンダントだ。

「……」

しばらく考へて、私はそのペンダントを手に取つた。
制服の下に隠せば、誰にも見つからない。校則違反だとしても、外に出しさえしなければいいのだ。

ふつと小さく笑つて、チエーンを外して首に通す。顔のむくみのせいでの最低なテンションが、1段だけ上昇した。

居間ではモト兄が、あぐびをかみ殺しながら新聞を読んでいた。

「おはよう」「うん」

声をかけると、言葉ではない、眠そうなうなり声が返ってきた。けれどこちらをちらりと振り向いたモト兄は、私の顔を見て、眠気が吹っ飛んだように目を丸くした。

腫れたまぶたをまじまじと見つめられ、私は居心地が悪くなつた。モト兄は私の顔から、きちんと用意の済んだ鞄と制服に目を移した。そうして、ふむ、と考え込むような顔をした。

何か、言われるだらうか。密かに身構えただれど、それは杞憂に終わつた。モト兄は肩をすくめて、「おはよ」と軽く返してきただけだった。

テーブルについて、用意された朝食を食べる。私がパンを食べるその間に、お父さんとモト兄は会社に行き、お母さんは町内会のゴミ出し当番に出て行つた。そして私が食べ終わる頃、アキがジョギングから帰つて來た。

アキはいつもと何一つ変わらなかつた。気まずそうな顔をすることも、つんと無視することもない。私の顔を見て、明るく笑つて言った。

「おはよう」

ごく当たり前の、普段の挨拶だ。朝から眩しいほどのその笑顔に、私はなんだか肩の力が抜けた。

これでも、ちょっと緊張していたんだ。昨日の夜の喧嘩とか、夢の中でのこととか。何か言おうと思つていたけど、やめた。一人で悩むのも馬鹿みたいだ。

代わりに私は、席を立つて尋ねた。

「何か飲む？」

「うん」

アキは短く答えて、お風呂場の方へと消えて行つた。

その間に、私はやかんを火にかけて、準備をする。食器棚からマ

グカップを一つ取り出して、コーヒーのドリッパーをセットした。アキの好きな豆の量は、もう、手が覚えている。

お湯が沸いて、いくらも待たないうちに、制服を着たアキが居間に戻つて来た。

毎度ながら、呆れるくらいにシャワーと着替えが早い。カラスの行水つて、こうこうことを言うんだろう。アキが言うには、一度運動部に入った奴は皆こうなるのだそうだ。……本当なんだろ？ 私はお湯を注いで、コーヒーをいれた。同時にアキは、黙つてコップをもう一つ取り出すと、牛乳を注いだ。

そうして互いに用意した飲み物を、私たちは何も言わずに、じくじく自然に交換した。

私はアキがついだ牛乳を、アキは私のいれたコーヒーを飲む。拍子抜けするくらい、いつもの朝だつた。

ふと急に、くすぐつたいような笑いがこみ上げてきた。私はコップを両手で持ち上げて飲むふりをしながら、こつそり顔を隠した。

嬉しいなんて、別に、言う必要もないだろう。

こうして一緒にいることは、何も特別なことじゃない。私たちは双子の兄妹、家族なのだから。

おまけ・魔法使いと天の邪鬼

休日は昼まで寝ているに限る。

仲間とわいわい遊びに行くのも好きだが、幸い俺は1人でも退屈しない質だった。何もしなくとも、自分の時間といつものほいぼーっと煙草を吸っているだけで、リラックスして頭がすつきりする。

そういうわけで、俺はこの貴重な休日を、のんびりと家で過ごしていた。パチンコにでも行こうかと思ったが、今月の懐具合を思い出してやめておいた。誰もいない家は広くて心地いい。両親は仲良く映画、弟は生徒会で学校、妹は友達と買い物に行っている。この隙に、久しぶりの一人を満喫しない手はない。

ソファーに腰を掛け、ラジオを小さくつけて、読んでいなかつた雑誌をめくる。自然と口元が緩んだ。ささやかだが、こういう潤いは大切だと思う。

気楽な実家暮らしだが、いつもして家で好きに過ごせるることはなかなかない。仕事であまり家にいないこともあるが、なにしろ長男なもので、いつもは座り心地のいいソファーもラジオのついたオーディオも、弟と妹に譲っているのだ。

俺には5歳違いの双子の弟妹がいる。

「兄貴だから」とあれこれ我慢させられることに反発を覚えたのは、もうずいぶん昔までだ。年の差もあるから、今では余裕をもつて大概のことは流せるようになった。まあ、弟妹に迷惑をかけられたことはほとんどないが。それに俺の方も、兄貴として立派なことをしてやった覚えはない。

弟も妹も、兄に面倒をかけない、良い子たちなので。

「ただいま」

玄関の扉が開く音で、つい真剣になつて雑誌を読んでいた意識がふと浮上した。

「おう。ずいぶん早いな」

まだ時計は4時にもなつていない。生徒会の集まりがある時、明彦は大抵帰りが遅いから、こんな中途半端な時間に帰つてくることは珍しかった。

「うん。そんなにやることなかつたから、早く終わった」

明彦は居間に入つてくると、ネクタイを緩めて前髪をかき上げた。この弟は、そういう仕草が嫌味なほど様になる。

「お疲れ」

俺は雑誌を閉じた。まだ途中だつたが、読みかけの雑誌より弟の方が優先だ。明彦と2人だけで話すのは、1人の休日よりも久しぶりだつた。

俺の弟の明彦は、すごい奴だ。身内の顎頬目を除いてもそう思つ。こいつは勉強も運動も大変できる奴だ。おまけに責任感もあつて、生徒会長なんかをやつている。明彦を見ていると、すぐえなあ、と俺は素直に感心してしまう。妬む気も起きないくらいだ。

家でも学校でも、明彦は問題を起こすということがなかつた。誰とでも上手くやれる奴、なんて俺は都市伝説だと思っているが、明彦を見ているとその存在を感じてしまう。いつも自然に人の中心にいて、笑顔で皆を惹きつける。あいつは子供の時から、ひどく大人びていた。ませているのとは少し違う。対応が大人なのだ。

それは、明彦と明子を並べてみるとよくわかつた。明子は小さい頃、癪疵持ちの子供だった。母親も手を焼いていたのに、明彦はなぜか明子をなだめるのが上手かった。明子の癪疵に引きずられるこ

となく落ち着いて話をして、いつの間にか明子の気を上手く逸らしているのだ。傍で見ていて、呆れるほどの手際だった。

男兄弟だし、面と向かつて褒めるなんてしたことはないが、とにかく大した奴だ。

明彦は黙つて鞄をテーブルに置くと、椅子に座った。「ソーリーもフアイルを取り出していくその姿を見ながら、俺と会話する気はあるかな、と考える。

自分が18の時の感覚は薄れてしまつてわからないが、家族に声をかけられるのも嫌な時期というのが、誰にでもあるからだ。このくらいの年頃の男にとっては、兄なんぞ田の上のたんじぶでしかないだろう。

明子には感じない逡巡を、明彦には感じる。俺は近頃この弟との距離を、いまいち計りかねていた。

作業を始めた明彦の邪魔になるとは思いつつ、俺は声をかけた。めつたにない機会だから、ウザい兄貴になるくらい構わないと開き直つた。

「 なあ。明子とは、もう仲直りしたのか？」

明彦はプリントをめぐる手をぴたりと止めた。怪訝そうな顔をして、こちらを振り返る。

でも、そんな顔をして誤魔化しても無駄だ。俺は思わず苦笑した。

「お前らこの間、喧嘩してただろ」

「 しないよ。喧嘩なんか」

明彦はふいと田をそらした。その反応に、おや、と思つ。ウザい兄貴的好奇心が疼いた。

「明子はかなり、ダメージくらついていたようだつたが？」

「……モト兄には敵わないな」

明彦は一瞬眉をひそめてから、観念したように小さく笑つた。

「仲直りといふか、一応普通になつたと思つ

「そりや、よかつた」

俺が肩をすくめると、明彦は視線を手元のプリンタに戻した。もう話は終わりだと思ったのだろう。

だが、甘い。暇な兄貴の詮索をなめるなよ。

「お前ね、18になつたからつて、ちよつと急ぎ過ぎたんだよ。

明子はまだガキだぞ」

今度こそ、明彦が顔を顰めた。

誰にも言つたことはないが、俺の覚えている一番昔の記憶は、病室で母親が赤ん坊を抱いている光景だ。

モトくん、今日からお兄ちゃんよ 。

そう言つて、母さんが腕の中の赤ん坊を俺に見せる。ピンク色の産着に包まれて、赤いサルのような顔をした女の子が眠つている。手なんかあまりに小さくて、俺は怖くて触ることができなかつた。尻ごみする俺を見て、母さんは苦笑してこう言つたのだ。

怖がつちゃ、かわいそうよ。可愛い女の子でしょう。

そう。

18年前、俺にできたのは妹だけだった。

けれどそれ以降の記憶では、明彦と明子の双子がちゃんと存在する。母親に聞いたつて、生んだのは双子だと言つだらう。だからこの一番古い記憶は、俺の頭の隅にしかないものだ。

幼い頃のことだから、単なる俺の覚え違いかもしれない。だがそ

うでなくても、今も昔も、俺に双子の弟妹がいることには変わりはない。誰にも言つたことがないのは、この記憶がどうでもいいものだからだ。

「本当、モト兄には敵わない」

明彦がため息をついた。できる弟をやつこめることができて、俺は良い気分で笑った。

「それでなくとも明子は、お前に妙に張り合おうとするところがあるからな」

「……張り合いつていうか、一方的にムカつかれてるだけだよね」明彦が途方に暮れたように頭をかく。

何てことないようすに言葉は軽いが、目を伏せる様子には根の深い悩みが見えた。

だが本気で困っている明彦には悪いが、俺は微笑ましいなと思つてしまつ。

「まあ、せいぜい頑張れや」

俺の軽い言葉に、明彦は少し驚いたように目を見開いた。

「いいの？俺が、頑張つても」

いいもなにも、と肩をすくめる。そんなの、俺が決める」とじやない。

「お前の好きにしろ。……でも、全部お前の思い通りにいくかどうかは、わからんぞ」

まずは明子の気持ち次第だ。それ以外にも実際こいつには、越えなければならぬ障害は多いだろう。軽い警告のつもりで言つた俺に、明彦は口の端だけで笑んだ。その日の奥が、きらりと光つたような気がした。

「そんなの、全力をつくすだけだ」

「こんなすこい奴の全力とは恐ろしい。だが明彦らしい自信に満ちた言葉に、俺は小さく笑った。

難儀な双子だ、と思つ。

お互に、コンプレックスに縛られているよう思つのだ。明子の劣等感はとてもわかりやすい。さすがに癪癢を起こすことは少なくなったが、あいつは嫉妬すると、すぐに態度に出る。その後に自己嫌悪するところも、劣等感を抱くくせに明彦と一緒にいたがる甘えたれなどにも、昔から変わらない。

だがコンプレックスは、決して一步通行ではないのだ。明彦のそれは明子より見えにくいだけで、確かに存在している。この間、誕生日に明子へネックレスを贈つたことなんかに、少し表れていると思う。明彦は、自分が明子に最も影響を与える存在だと自覚しているし、その位置を誰にも譲るつもりはないのだ。

そしてどうやら一歳になつたのを期に、より明子を独占できる位置に、動き出そうとしているようだった。

そのことに關して、俺は別に反対はしないし、積極的に協力することもない。

立派じゃない兄貴はただ見守るだけだ。明彦と明子がこれから、何をどう選ぶかは俺が決めることじゃない。あいつらの自由だ。魔法使いのような弟は、天の邪鬼な妹の心を解きほぐすことができるのか。見ものだと思つてしまふあたり、やはり俺は気楽な傍観者でしかないのだろう。

別にどうなるうと、俺が2人の兄貴だということに変わりはない。どちらも俺にとっては、可愛い弟と妹なのだから。

だけど、弟と妹が兄妹以上の関係になつたら、さすがに一つ屋根の下の家族としては気まずいかもしない。

「……俺、家を出て独立しようかな」

ふと俺が呟くと、明彦は目を丸くした。

「え、どうして?」

「まあ、長男だしな。そもそも、自活能力もつけようかと」曖昧に誤魔化すと、明彦はピンとこなさそうに、ふうんと頷いた。

「めーこが寂しがるよ、モト兄がいなくなると」

そうだろうか。一つ部屋が空いて、喜んで物置部屋を作る母と明子の姿しか、俺は思い浮かべることができない。

「お前はどうだ、寂しいか?」

聞くと、明彦はにっこり笑った。

きっと女なら赤面するんだろうと思つてから、完璧な笑顔だった。

「早く出てけよ、クソ兄貴」

爆笑した。さすが、俺の弟だ。

おまけ・魔法使いと火の邪鬼（後書き）

お読みください、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0214q/>

野田さん家の3兄妹

2011年2月1日00時41分発行